

キントキダイ科キビレキントキ *Priacanthus zaiseræ* の 奄美大島からの記録

ジョン ビョル¹・本村浩之²

¹ 〒 890-0065 鹿児島市郡元 1-21-30 鹿児島大学総合研究博物館（水産学研究科）

² 〒 890-0065 鹿児島市郡元 1-21-30 鹿児島大学総合研究博物館

はじめに

キントキダイ科魚類はインド・太平洋と大西洋に広く分布するスズキ目魚類である。本科魚類は、従来世界で4属18種が知られていたが (Starnes, 1988), *Pristigenys nipponia* (Cuvier, 1829) の新参異名とされていた *P. refulgens* (Valenciennes, 1862) が Iwatsuki et al. (2012) によって有効種とされたため、現在は4属19種が有効種とされている。一方、日本からは4属11種が知られている (林, 2013)。本科魚類は体が側扁し、体高が比較的高く鶏卵形または長楕円形、眼と口が大きい、体が櫛鱗で覆われる、背鰭が1基、背鰭棘が10本、臀鰭棘が3本、腹鰭と腹部が膜で繋がる、および生時の色彩が明るい赤色であることなどによって特徴付けられる (Starnes, 1988)。

キビレキントキ *Priacanthus zaiseræ* Starnes and Moyer, 1988 は、これまでに伊豆諸島 (三宅島)、神奈川県以南の太平洋沿岸、沖縄本島、尖閣諸島、東シナ海から記録されていた。2013年12月9日に奄美大島にて、キビレキントキと同定される2個体が採集された。これらは奄美群島におけるキビレキントキの標本に基づく初めての記録となるため、ここに記載し、報告する。

材料と方法

標本の計数・計測方法は Hubbs and Lagler (1947)

Jeong, B. and H. Motomura. 2014. First records of *Priacanthus zaiseræ* (Perciformes: Priacanthidae) from Amami-oshima island, Kagoshima Prefecture, Japan. *Nature of Kagoshima* 40: 43-46.

✉ HM: Kagoshima University Museum, 1-21-30 Korimoto, Kagoshima 890-0065, Japan (e-mail: motomura@kaum.kagoshima-u.ac.jp).

と Starnes (1988) にしたがった。計測はデジタルノギスを用いて 0.1 mm 単位まで行い、計測値は体長に対する百分率で示した。標準体長 (standard length) は体長 (SL) と表記した。生鮮時の体色の記載は、KAUM-I. 57884 と 57885 の生鮮時のカラー写真に基づく。比較で用いた計数・計測値は Starnes (1988) に基づく。標本の作製、登録、撮影、固定方法は本村 (2009) に準拠した。本報告で用いた標本は、鹿児島大学総合研究博物館 (KAUM: Kagoshima University Museum) に保管されており、KAUM-I. 57884 と 57885 のカラー写真は同館の画像データベースに登録されている。

結果と考察

Priacanthus zaiseræ Starnes and Moyer, 1988

キビレキントキ (Figs. 1-2; Table 1)

標本 KAUM-I. 57884, 体長 155.8 mm, KAUM-I. 57885, 体長 170.2 mm, 鹿児島県大島郡瀬戸内町, 2013年12月9日, 萩原清司・本村浩之・中江雅典・千葉 悟・目黒昌利・吉田朋弘・田代郷国・横山貞夫。

記載 計数値を体各部の体長に対する割合を Table 1 に示した。体は長だ円形で、側扁する。躯幹部の体高は一定であるが尾柄部から急に低くなる。吻端から背鰭起点までの背中線はなだらか。眼は頭部の背方にあり、大きい。口は大きく、下顎が上顎より突出する。上顎後端は眼の前半直下に達する。両顎、鋤骨、口蓋骨には尖った小さい円錐形の歯がある。鰓耙はよく発達する。前鰓蓋骨隅角部には1後向棘があり、その先端は鰓蓋骨後縁に達しない。鰓膜は峡部と分離する。背鰭棘



Fig. 1. Fresh specimen of *Priacanthus zaiserae* (KAUM-I. 57884, 155.8 mm SL, Amami-oshima island, Kagoshima, Japan).



Fig. 2. Preserved specimen of *Priacanthus zaiserae* (KAUM-I. 57885, 170.2 mm SL, Amami-oshima island, Kagoshima, Japan).

は後向ほど長くなり、最後の第10棘が最長。背鰭と臀鰭の軟条部は広く、後縁は円い。背鰭の棘条部と軟条部の間には欠刻がない。腹鰭の後端は臀鰭の第1-2棘間あるいはそれよりわずかに後方に達する。尾鰭は截形。背鰭第1-6棘 (KAUM-I. 57884では1-5棘)、臀鰭第1-3棘、腹鰭第1棘、背鰭と臀鰭の軟条は鋸歯縁をもつ。鰓蓋骨後縁を

除いて体全体が櫛鱗で覆われる。

色彩 生鮮時の色彩 (Fig. 1) 一体は鮮紅色で体背面が腹面より濃い赤色。眼の虹彩も鮮紅色。背鰭、臀鰭、尾鰭の後縁は鮮紅色で、基部はオレンジ色を帯びる。腹鰭の鰭膜はうっすらと黒味を帯びる。腹鰭基部に明瞭な黒斑はない。胸鰭は薄い黄色で、斑紋はない。固定後の色彩 (Fig. 2) 一

体, 胸鰭, 尾鰭はクリーム色. 腹鰭の鰭膜, 背鰭と臀鰭の軟条部の後縁はやや暗色を呈する.

分布 日本とフィリピン (シアヤン島) からのみ記録されている (Starnes, 1988). 国内では三宅島, 神奈川県三浦, 静岡県内浦, 三重県志摩, 尖閣諸島 (林, 2013), 沖縄県糸満 (Starnes, 1988), 東シナ海 (山田, 2009), および奄美大島 (本研究) から記録されている.

備考 *Priacanthus zaiserae* は Starnes and Moyer

in Starnes (1988) によって新種として記載された (タイプ産地は三宅島). 奄美大島産の標本は背鰭が 10 棘 13 軟条, 臀鰭が 3 棘 14 軟条, 胸鰭軟条が 18–19 本, 側線鱗が 74 枚, 側線上方鱗列が 11 枚, 側線下方鱗列が 41–45 枚, 鰓耙が 6+20 本, 固定後に腹鰭の鰭膜が暗色を帯びる, および生鮮時に胸鰭が黄色であることから *P. zaiserae* の原記載に記載された特徴と完全に一致した. しかし, 奄美大島産標本と *P. zaiserae* の原記載を比較した結

Table 1. Counts and proportional measurements, expressed as percentages of standard length, of *Priacanthus zaiserae*.

	This study <i>n</i> = 2	Starnes (1988) <i>n</i> = 10*
Standard length (mm)	156–170	133–235
Counts		
Dorsal-fin rays	X, 13	X, 13
Anal-fin rays	III, 14	III, 13–14
Pectoral-fin rays	18–19	18–19
Pelvic-fin rays	I, 5	I, 5
Lateral-line scales	74	71–76
Scales above lateral line	11	9–11
Scales below lateral line	41–45	40–45
Gill rakers	6 + 20	5–6 + 19–22
Measurements		
Body depth	37.8–38.2	37.3–40.9
Body depth at sixth dorsal spine	37.5–37.9	—
Body depth at first anal spine	36.6–37.3	—
Body width	16.6–17.7	16.3–19.8
Head length	35.3–35.7	30.0–33.5
Head depth	29.2–29.3	33.7–36.9
Head width	19.3–19.9	17.0–20.4
Snout length	10.1–10.3	7.8–10.1
Orbit diameter	16.1–16.6	15.2–17.3
Interorbital width	8.3–8.8	7.6–8.7
Upper-jaw length	18.2–18.5	—
Lower-jaw length	13.7	—
Pre-dorsal-fin length	32.8–33.5	—
Pre-anal-fin length	57.5–58.0	—
Pre-pectoral-fin length	35.3–35.4	—
Pre-pelvic-fin length	36.5–37.4	—
Dorsal-fin base length	57.5–57.6	—
First dorsal-fin spine length	4.8–6.0	—
Second dorsal-fin spine length	8.5–9.0	—
Third dorsal-fin spine length	10.3–11.6	—
Longest dorsal-fin spine length (10th)	15.7–16.4	13.9–16.4
Longest dorsal-fin ray length (2nd)	20.3–20.4	16.1–19.5
Anal-fin base length	33.8–35.4	—
First anal-fin spine length	7.1–8.0	—
Second anal-fin spine length	10.1–11.6	—
Third anal-fin spine length	14.2–15.4	—
Longest anal-fin ray length (2nd)	19.9–20.7	15.1–17.9
Longest pectoral-fin ray length	18.4–19.1	17.0–19.3
Pelvic-fin spine length	20.8–21.3	—
Longest pelvic-fin ray length (2nd)	26.8–27.2	25.4–27.8
Caudal-peduncle length	16.0–16.5	14.8–16.4
Caudal-peduncle depth	8.3–8.8	7.7–8.9
Caudal-fin length	22.0–22.9	—

*Counts based on 13 specimens (Starnes, 1988); values given in Starnes (1988) were expressed as thousandths of SL which were converted here into percentages.

果、前者は頭長が体長の 35.3–35.7% とやや長いこと（原記載では 30.0–33.5%）、頭高が体長の 29.2–29.3% とやや低いこと（33.7–36.9%）、背鰭軟条長が体長の 20.3–20.4% と長いこと（16.1–19.5%）、臀鰭軟条長が体長の 19.9–20.7% と長いこと（15.1–17.9%）などの相違が確認された（Table 1）。これらの相違が地理的変異を示すものなのか、単なる個体変異であるのか、今後のさらなる標本調査が必要である。

林（2013）はキビレキントキ *P. zaiserae* の日本国内における分布を「三宅島、神奈川県三浦、静岡県内浦、三重県志摩、尖閣諸島」とし、琉球列島を分布域に含めなかった。しかし、Starnes and Moyer in Starnes (1988) は *P. zaiserae* の原記載の中で、沖縄県糸満産の 2 個体をパラタイプに指定している。さらに、町田（1985）が沖縄舟状海盆から *Priacanthus* sp. a として報告した標本は、記載文と標本写真からキビレキントキと同定される（Shinohara et al., 2005；本研究）。Shinohara et al. (2005) は本種を琉球列島から報告したが、標本に基づくのではなく、町田（1985）を根拠とした。山田（1997）は東シナ海産の標本写真を提示し、本種の分布域として「南日本太平洋側、琉球列島、東シナ海以南」とした。山田（1997）が本種の分布域として琉球列島を含めた根拠は不明であるが、本種のパラタイプ（沖縄本島産）に基づくものと思われる。依田ほか（2002）は東シナ海・黄海産魚類目録にキビレキントキをリストしているが、東シナ海産なのか黄海産なのか不明である。しかし、依田ほか（2002）を根拠として書かれたと思われる山田ほか（2009）は、本種の分布域として「南日本太平洋側、琉球列島、東シナ海以南」としているため、依田ほか（2002）の記録は東シナ海だと思われる。したがって、これまで奄美群島以北の琉球列島沿岸から本種が記録された報告はない。なお、奄美大島産のキビレキントキは、奄美群島固有種のホシレンコ *Cheimerius matsubarai* Akazaki, 1962 (KAUM-I. 57871, 体長 224.4 mm) と同時に水揚げされていたことから、奄美群島近海から漁獲されたことに間違いはない。したがって、本研究で調査した標本は、キビ

レキントキの標本に基づく奄美群島近海からの初めての記録となる。

■ 謝辞

鹿児島大学総合研究博物館の魚類分類学研究室の学生諸氏とボランティア諸氏には標本の作製や処理などについてご協力をいただいた。西海区水産研究所の岡本 誠氏には文献調査をして頂いた。以上の方々に対して深く感謝の意を表す。本研究は、鹿児島大学総合研究博物館の「鹿児島県産魚類の多様性調査プロジェクト」と国立科学博物館の「日本の生物多様性ホットスポットの構造に関する研究プロジェクト」の一環として行われた。

■ 引用文献

- 林 公義. 2013. キントキダイ科. 中坊徹次（編）, pp. 822–825, 1978–1979. 日本魚類検索 全種の同定 第3版. 東海大学出版会, 秦野.
- Hubbs, C. L. and K. F. Lagler. 1947. Fishes of the Great Lakes region. Bull. Cranbrook Inst. Sci., (26): i–xii+1–186.
- Iwatsuki, Y., T. Matsuda, W. C. Starnes, T. Nakabo and T. Yoshino. 2012. A valid priacanthid species, *Pristigenys refulgens* (Valenciennes 1862), and a redescription of *P. nipponia* (Cuvier in Cuvier & Valenciennes 1829) in the Indo-West Pacific (Perciformes: Priacanthidae). Zootaxa, 3206: 41–57.
- 町田吉彦. 1985. キントキダイ科. 岡村 収（編）, pp. 476–483. 沖縄舟状海盆及び周辺海域の魚類 II. 日本水産資源保護協会, 東京.
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島市, 70 pp. (<http://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/staff/motomura/dl.html>)
- Shinohara, G., T. Sato, Y. Aonuma, H. Horikawa, K. Matsuura, T. Nakabo and K. Sato. 2005. Annotated checklist of deep-sea fishes from the waters around the Ryukyu Islands, Japan. Deep-sea fauna and pollutants in the Nansei Islands. Natl. Sci. Mus. Monogr., (29): 385–452.
- Starnes, W. C. 1988. Revision, phylogeny and biogeographic comments on the circumtropical marine percoid fish family Priacanthidae. Bull. Mar. Sci., 43(2): 117–203.
- 山田梅芳. 1997. キントキダイ科. 岡村 収・尼岡邦夫（編・監修）, pp. 286–287. 日本海水魚. 山と溪谷社, 東京.
- 山田梅芳・時村宗春・星野浩一・鄧 思明・鄭 元甲・李 圣法・金 英燮・金 眞久. 2009. 東シナ海・黄海魚名図鑑 新版. 財団法人海外漁業協力財団, 東京. xi + 784 pp.
- 依田真里・時村宗春・堀川博史・山田梅芳. 2002. 東シナ海・黄海産魚類目録およびその地方名. 西海区水産研究所, 長崎. iii + 42 pp.